

801-1(齊)

俳諧資料カード

年代

享和元

編者  
(筆者)

書名

逸遊俳諧  
(口述)

備考

元禄十三年  
刊 明和五周年  
如願 寛政六年刊

15/17 (下垣内蔵)

(用二命天全)



反白之事

箱田云念想乃内之念と起す  
是と起すは念想乃物中  
一物之立向念想は是部之月名と  
起す。是は自立乃白起と流す  
又起すは定免白と起す。又始て  
の念想は地盤と起す。と起す。心  
其の後、中と起す。念と起す。念物と

の<sup>り</sup>放<sup>り</sup>心<sup>を</sup>動<sup>さ</sup>か<sup>る</sup>白<sup>く</sup>成<sup>る</sup>は<sup>し</sup>是<sup>の</sup>  
母<sup>を</sup>有<sup>る</sup>を<sup>は</sup>境<sup>に</sup>して<sup>は</sup>白<sup>と</sup>論<sup>す</sup>  
の<sup>を</sup>有<sup>る</sup>物<sup>は</sup>実<sup>と</sup>正<sup>と</sup>の<sup>を</sup>白<sup>と</sup>万<sup>の</sup>白<sup>の</sup>  
上<sup>を</sup>も<sup>と</sup>動<sup>さ</sup>か<sup>る</sup>有<sup>る</sup>人<sup>は</sup>

切字の久変

口傳

幸<sup>の</sup>海<sup>の</sup>の<sup>を</sup>云<sup>は</sup>其<sup>を</sup>勝<sup>る</sup>  
の<sup>を</sup>春<sup>と</sup>白<sup>の</sup>人<sup>は</sup>也<sup>や</sup>

又

見<sup>渡</sup>せ<sup>る</sup>每<sup>と</sup>知<sup>る</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>  
失<sup>は</sup>れ<sup>る</sup>か<sup>ら</sup>夕<sup>の</sup>月<sup>は</sup>

眼<sup>の</sup>年<sup>年</sup>

眼<sup>は</sup>法<sup>を</sup>發<sup>分</sup>と<sup>陽</sup>小<sup>合</sup>居<sup>る</sup>一<sup>と</sup>そ  
の<sup>を</sup>方<sup>と</sup>天<sup>地</sup>也<sup>の</sup>男<sup>女</sup>と<sup>は</sup>実<sup>人</sup>  
其<sup>を</sup>或<sup>と</sup>親<sup>子</sup>の<sup>を</sup>法<sup>は</sup>也<sup>の</sup>心<sup>は</sup>智<sup>の</sup>  
の<sup>を</sup>意<sup>と</sup>法<sup>は</sup>一<sup>の</sup>法<sup>と</sup>也<sup>の</sup>所<sup>と</sup>其<sup>の</sup>  
来<sup>る</sup>法<sup>と</sup>也<sup>の</sup>已<sup>と</sup>也<sup>の</sup>

かきし「将富の池白布」とは河津  
まはらと安小知る片もさく面は  
はらよま本字と重気漢和を以  
類と用もさかり只部は文字を  
苗字の中今古愛か

弟三之書

天地より今中世のそと一絶を親  
筆負ふ小相書は「譬」字を「百句

百句」と是より絶始「巻」成りたるの  
く負字苗の池は保るは

蝶を成規と見了る系

気字とみく

凡あり胡蝶とる系系柳

気と文字ととや「系」の法なり

眼のひらき「苗」中「系」負字亦「系」

と此名通「白」池と「清」法保るは

木根は心所行の次

月小月花の根と云ふ事

病の患の難い為と云ふ事

こゝ

堂上方の月の根母

信濃路の事と云ふ事

元暦の事と云ふ事

娘と姑の中と云ふ事

美小橋と云ふ事

前根の事と云ふ事

必ふは河舟の根有る事

盤の事と云ふ事

根の事と云ふ事

の事と云ふ事

首括授木の事と云ふ事

梢の事と云ふ事

はらり

林海棠梨子と母とあり

弟の心小夫とて情式とて心木とて  
同意とて心事とて

月事史記

意象とて因縁とてはきとて  
度々

十一法海方の変

海

理付

決地乃と坊とて夏木と

甲斐の松とて智れ聚也

遠海

項平とて一と軍一完中

松乃とて心とて氣席の志此と

離付

旅々と物と事と知あり

はらりと雨喜る人

其人

鶴見見ふらとよき新のく

年ふらふらとよき新のく

之場

鏡子とりと者友らとよき

中家と東一れらとよき

時分

ふくと家小鏡と押南を

夜とあふくとゆけ六のこ

時分

息負小鏡又の白段の目打

堪志あふに七夕の思

京也

まこと大子の歌えお

花より田のまゆとよき

向月

江戸の友右衛門の考也

六つと七つと八つと九つと

心身

姉と妹の別は貴い

借取らぬと云ふは

白

小波の巻の白ひいて

百白の巾着物に

深き味を知る

答

麦畑の踏んで

賣くは

寂

町内の秋と

公と

櫓

早之月之辰二十八日

此は古きい孫く軍は大事

水語二字一事

古身より櫓くろ常盤はあり

君は水語の二字と然しと定

ら

鳥つこ部集し変

冬の日 梅 峯 岩

万葉古く松遺りしは梅峯

の序甚角水語文字とかり

事此とあり

親白 逆白 変

アイウエオハニホヘトチチニフフフ

音通す先親之逆と常此

は法あり



一字摩訶

古也や蛇足也水乃者

今の者として摩訶とせし摩訶

多句小句

二句二端

初一これ後も小義をいへ

翁老母の病とくはし治るは

親の心は海無小後の我み

親の心は海無小後の我み

母の心は海無小後の我み

一聯二句

親者の心は海無小後の我み

花の雲海と野の海無小後の我み

句の心は海無小後の我み

横骨

秋の死ねるも一と云ふは輝の声

その勢いなる甚なり明の廣泉  
松の心骨とわが法の

雙友園

かたはつ角ゆり分酒深  
はるまゝとる海せりし

交遊の度

夕白や穂只ちくの瓢か  
秋の白やちのむらさ

一面の白くちのむらさ

中をたやちの法とて

秋の味

菊乃香やちのむらさ

菊乃香は二日目の月かりとて

九重のありあり重湯の糸

ねたると秋と暗るる

の白法なり

白

卯の朧やうらやうら柳は夜  
夏柳のうらやうらとてはひさし  
のうらやうらとてはひさし

風

浪網の遠くをよき風  
市町の安をよき風  
まよりの一字一風

寂

わが片聲をよき風  
人の聲とてよき風  
よき風をよき風とて  
寂とてよき風

梳

はなさら月よ思ふ物  
一字一風

物とてし海

草

系法とて毛之れ然る七玄 踏

竹の文を何...の故と意とせ

と小革...なり

の

道法...の...馬...の...色...

人の...の...内...の...世...の...所

業...の...由...の...行...部

...の...と...の...の...の...の...の...

...の...と...の...の...の...の...の...

真

象...の...の...の...の...の...の...

象...の...の...の...の...の...の...

象...の...の...の...の...の...の...

女...の...の...の...の...の...の...

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

念をたす神に余情誠は是れ也

事の春と幸のひよと咲く今を  
観る小對と絶くありて地を居  
の空情の上の心

### 賸物の事

暇シラシラ強シラシラの海は出たは世の  
章一ら終るの終りしるは世の  
の心は終る終るは世の  
小定る文字千余の先と終る

色ぬる賸物とありて海は終る  
一は終る一は終る一は終る  
武者と幼法一海は終る  
後城は終る終るは終る  
産産實の事

旅くらしの初めの海は終る  
實小産有終と世終る  
實のと文章一と終る

り今の人情はふたむね

金持の世と世とらら

先実小居も産るの世智人

世とららららららら

先産居も実しとるの事

一向世とららららら

先産居も実しとるの事

一向世とららららら

先産居も実しとるの事

一向世とららららら

先産居も実しとるの事

託法悟谷の巻

起ておるに法とひ中と一悟

中と起るに法とひ中と一悟

中と起るに法とひ中と一悟

名持く産るや百中



聊以遺書者之

實政六卷

三月廿四日

押倉  
孤

先生

享和元年

三月廿三日

寫之



新刊  
卷之十  
目錄



